

はじめに

日本学術振興会の拠点校方式により、京都大学生存圏研究所が日本側の拠点校となり、インドネシア、マレーシアとの間で、熱帯森林資源の持続的な生産と利用という、アジアの地域性からみて、また循環型社会の構築という視点からは世界的にも重要な課題について、国際的な学術交流事業を実施してきた。

この事業は、1996年（平成8年）に日本学術振興会とインドネシア LIPI（インドネシア科学院）との間で“木質科学分野”における「拠点大学方式による学術交流事業」が発足したことを受けて始まったもので、本年が最終年度である。この10年間における日本側研究協力者は151名に達し、インドネシア側は164名の研究者が参加し、さらに、マレーシアから12名、タイ、フィリピン、ベトナムから各1名の研究者が加わった。

交流事業の内容は、研究者交流、国際共同研究とセミナー開催のフレームワークに沿って実施されてきたが、1996、1998、2000、2002、2004、2005年度には日本とインドネシア側で交互に木質科学に関する国際学術シンポジウムを、合計6回開催してきた。国際共同研究については、木質材料科学、木質バイオマス科学、木質生命科学、環境科学等との横断的研究の4つのカテゴリーのもとに、合計26の課題について実施し、熱帯森林資源の持続的な生産と利用を目指した研究成果を達成してきた。

これらの交流や共同研究を通して受入国、派遣国双方の研究レベルを向上させるとともに、教育面における交流や支援を積極的に行ってきた。インドネシア LIPI の拠点校 (Research & Development Unit for Biomaterials) に Satellite Office を開設し、交流事業の円滑な連絡・運営の場所とするとともに、関連分野における学術・技術の知の集積の場としての展開をはかった。さらに特筆すべきは、最終年度に今までの国際学術交流の成果が稔り、京都大学と LIPI との大学間国際学術交流協定の締結に至った。

この拠点校方式による国際交流事業の総括的な成果については、2000年に研究業績を取りまとめた英文冊子“Science for Sustainable Utilization of Forest Resources in the Tropics”を世に出した。また、2002年度に交流の歩みを振り返り事業成果を自ら評価した「実績・評価報告書」刊行し、2004年度に改めて今までの交流事業を出発時点に立ち返って整理し、「実績・成果報告書」をとりまとめた。最終年度である今年度には、2000年に出版した英文冊子を補完する英文報告集“Sustainable Development and Utilization of Forest Resources in the Tropics” (Report of JSPS-LIPI Core University Program) を出版した。

この CD 版報告書は、2004 年度に刊行した「実績・成果報告書」をもとに 10 年間の事業成果を取りまとめたものである。本報告書が、実りある交流事業の達成の証しとなるとともに、今後のさらなる発展のための礎になることを期待したい。

将来は生存圏研究所が拠点となり、他のアジア諸国を含めた包括的な交流プログラムを立ち上げ、森林資源の持続的な生産と利用を基本に人類生存圏の診断・治療・再生にかかわる国際共同研究を推し進めるとともに、アジア諸国の科学技術・教育の将来を担う人材の育成に貢献することを願っている。

本報告書の作成にあたっては、日本側ならびにインドネシア側の研究協力者の皆様、ならびに生存圏研究所、宇治地区事務部のご力添えを得た。特に、

サブコーディネーター：梅澤俊明

生存圏研究所：梅村研二

研究協力課国際協力掛：飛田清隆、結城美和

研究所担当事務：野田村佳子

非常勤職員：田代 愛

の各氏をはじめ、多くの方のご協力に対して厚く御礼申し上げます。

平成 18 年 3 月末日

京都大学生存圏研究所
所 長・川井秀一

日本側コーディネーター
京都大学生存圏研究所
教 授・今村祐嗣